森と水に関する意識調査

岩手県国有林造林生産請負事業協議会
専務理事　山 田 徹 治

1．課題を取りあげた背景

(1)　地元マスコミは、岩手の環境はおおむね良好に維持されている。という論調であるが、酸性雨の恐怖は岩手の森にも忍び寄っていると指摘している。

最近、地元紙は「水資源を考える」をテーマに特集を組んだ。県民の森を守れという声は、森林が減少している現実を認識しているからである、としている。

また、もしも森の緑が消えてしまったら、森の動植物は姿を消し、谷川の水も消え、水不足恒常化が予測される、と報じている。

このようなマス・メディアが都市生活者にどのような形で影響をもたらすのか、関心を寄せるところである。

(2)　国民の関心は、自分の周辺になくなってきた自然を渇望する形で表れ、緑や水に対する強い欲求となって表れる。

緑や水に対する関心は高いが、都市に住んでいる人の中には、水の供給を受けているのに、緑の恩恵を受けていない、と思っていたり、日本は緑が少ないとか、国有林には木がない、と思っていたり、問題意識の人は少なくない。

また、スギなどの針葉樹林を低く評価し、広葉樹林を偏重しがちである。

(3)　環境保全に関する世論の高まりをマス・メディアが大きく取り上げる昨今、都市生活者は、これらの問題について、どのような意識の中にいるのか、いまこそ、その一端を明らかにしなければならない。

2．調査の方法

(1)　盛岡市は、中津川、雫石川を集め水豊かな北上川が流れる県都である。

また、雄大な岩手山を朝な夕なに望める街でもある。

このような自然豊かな環境に住む人びとが、「森」そして「水」に関しどのような意識を持っているのだろうか。

盛岡市に居住する成人を対象に、無作為に 500人を選んで、「森」と「水」に関する葉書によるアンケート調査を実施した。

質問は全部で８問とし、質問に対する回答を質問項目一つにつき、３～４の回答を準備して、該当の項目を○で囲んでもらう方法とした。ただし、質問項目の８番については、回答を６項目とし、複数回答とした。

アンケート調査の葉書郵送の翌日から回答があって、回答が約50パーセントに達した時点で締切って質問項目毎の集計を行うとともに、若干の分析を試みたところである。回答は現時点でも日に３～４通届いているので、最終回収率は60パーセントを超えるのではないかと考える。

3．調査の結果

(1) 質問事項－1

「近い将来（5～10年）水の安定供給に関して、どうのようなお考えですか」に対する回答は、表－1のとおりである。

不安があると回答した人が多いが、具体的な根拠を持ち合わせている人は極めて少ないと推測されるので、ばく然とした不安を抱いていると思われる人が81パーセントにも達する高い値となった。

表－1　水の安定供給

不安はない	不安がある	大きな不安がある
19％	65％	16％

不安がある、大きな不安があると回答した人を年代別、職業別に整理してみたが、はっきりした特徴は認められなかった。

(2) 質問事項－2

不安がある。大きな不安がある。と回答した人へ「どんな不安があるのか」聞いたところ表－2の回答となった。

近い将来、水量、水質の双方に問題が起きるのではないかとする向きが76パーセントに達した。問題が起きるときは、性格の異なる水が不足だという問題と、水が汚れたという問題が同時に提起されるのではないかという悲観的な見通しに立っている。

表－2　どんな不安か

水量に不安	水質に不安	水量と水質に不安
8％	16％	76％

年代、職業の別なく押しなべた回答となっていることは、質問事項－1と同様である。

(3) 質問事項－3

「水不足対策」についての質問に対する回答は、表－3で示すように「適切な森林管理」に水不足対策を求める人が80パーセントと高く、期待の大きいことが示された。

水不足対策を考える場合、水の供給量に見合った都市計画をしっかり行政がもっているかどうか、ということと、極端な寡雨では森林の条件のいかんにかかわらず水不足となることを回答者が理解しているだろうか、時として、森に向って過大な要求の声となって返ってくるのではないか、という懸念をもってしまったところである。

表－3　水不足対策

適切な森林管理	節水、再利用に努める	ダムを作る
80％	16％	4％

(4) 質問事項－4

「一向に雨が降らなくとも、なぜ川の水がなくならないのか、の疑問へお答下さい」という質問を試みた。

発明王エジソンは、少年時代何日も旱天が続いて一向に雨が降らないとき、なぜ川の水がなくならないのかと疑問をもち、大人達に質問を浴びせて困らせたという有名な話を設問にしたものである。

わが国のように険しい山が多く、しかも降水が季節的に大きく変動するところでは、洪水を防ぎ、大切な水を貯える森林のもつ水源かん養機能は極めて重要である。

回答は、表－4にみるように、豊かな森林、緑のダムに寄せる期待が高いことを示している。

表－4　なぜ川の水がなくならないのか？

ダムで調整しているから	水を貯える森林があるから	高い山にいつも雨が降っているから
6 %	92 %	2 %

(5) 質問事項－5

「県内の奥地水源地帯に多く位置する森林はどれですか」という質問であるが、県内国有林の分布に関する認識を調べようとしたものである。

表－5で明らかなように、80パーセントに迫る人が国有林野の分布状況を知っていることを示した。

岩手の森林面積は県土の77パーセントを占める森林県にあって、国有林野の分布は奥羽山系と北上山系の奥地水源地帯に位置している。その面積は約40万ヘクタールあり、国有林が岩手の景観と水を作っているといってもいいのではないだろうか。

表－5　奥地水源地帯の森林の多くは

民有林	国有林	県有林等公有林
8 %	78 %	14 %

(6) 質問事項－6

「森林の保水能力が低下してきているという声を聞くことがあるが、どうしてこのような意見がでるとお考えですか」と聞いてみた。その結果は、表－6のとおりであった。

前述したとおり、スギなどの針葉樹林を低く評価し、広葉樹林を偏重しがちな時代の風潮から予測された結果ではあったが、ハゲ山が多くなったからと回答した人が33パーセントにも達したことは全く意外であり、どう理解すればよいのか困惑するところである。

表－6　保水能力低下の声はなぜ？

ハゲ山が多くなったから	ブナ林等の広葉樹林が少なくなったから	人工林が多くなったから
33 %	43 %	24 %

ハゲ山という表現をどうとらえたかという問題があろう。草木の全く生育していない赤土の山というとらまえ方ではなく、皆伐の伐跡地や、造林して間もない造林地を、大きい木がないからハゲ山と考えているのではなかろうか。

それにもう一つは、マス・メディアが国有林の伐採に関する誇張報道の影響が少なからずあると見ることができよう。

ハゲ山が多くなったから、と回答した人を居住地で分析してみると、盛岡市の中心部、県庁所在地から半径約８キロメートルの範囲の商業活発地域に居住する人が87パーセントを占めている。

一口に「国有林に木がない」という一方的な媒体の影響力を感じざるを得ないと同時に、国有林が地域の自然的、社会的、経済的条件を十分に勘案した適正な森林施業に努めていることを広くＰＲし理解を求める必要がある。

(7) 質問事項－７

「水道の蛇口をひねるとき、あなたは水道水から何を連想しますか」と聞いてみた。

森林と回答した人が39パーセントであった。川と回答した人が38パーセントで、森林と回答した人と略同じである。盛岡市民は、毎日の生活の中に川と密着した関係を持っていることが、このような結果に表れたのではなかろうか。というのは、質問事項－４で「…川の水がなくならないのは」水を貯える森林があるからと回答した人が実に92パーセントだったことを考えると、森からのメッセージは川ほどに市民には届いていないのである。

表－７　水道水からの連想

ダ　ム	川	森　林	水道局等
１０％	３８％	３９％	１３％

(8) 質問事項－８

「産業育成について、特に振興を図るべき産業を３つ挙げて下さい」と、複数回答を求めたものである。

その結果は表－８のとおりである。

表－８　産業育成で特に振興を図るべき産業

農　業	林　業	水 産 業	牧 畜 業	建設業、製造工業等二次産業	電気、通信、商業観光等三次産業
１６％ (22)	１５％ (29)	６％ (13)	６％ (６)	２８％ (14)	２９％ (16)

(注) 裸書は、第１位に挙げた回答者の割合、（　）は第３位までに挙げた回答者の割合。

一次産業の振興を図るべしとした人が、70パーセント、次いで三次産業の16パーセント、二次産業14パーセントの順となった。一次産業の順位をみると林業が29パーセント、農業が22パーセントと続き、全産業を通じて林業振興を図るべしとする人が高い割合を示した。

このように林業振興の必要性に高い支持を示しているが、第１位に林業を挙げた人は少なく、多くは第２、３位に挙げた人が多かった。その結果、第１位に挙げた産業別順位では、林業は第４位であった。

回答者は押しなべて林業振興を図るべしといっているものの、第１位に挙げた人は少なく、林業振興の潜在パワーは、あまり大きなものではなかった。

産業振興という、産業投資の対象という側面から林業を見たとき、林業が意識の中核からはなれ追いやられて行くのであろうか。

水不足対策は、適切な森林管理にあると回答した人も、川の水がなくならないのも、水を貯える森林があるからだ、と回答した人も、目の前の生活の便利さ、快適さに視線が向くのであろう。発展をとげる華やかな二次、三次産業を第１位に挙げる人が多く、都市化社会の価値基準の判断をみせつけられたような気がする。

４．おわりに

県内国有林の存在についてはほぼ正しい認識に立っているといえるので、森林の取扱いが市民注視の中にあることが分かった。また、国有林と特定していないが、奥地水源地帯にハゲ山が多い、という実態とかけ離れた事実誤認があることは、解消の手立てを講じなければならないだろう。

森林の役割り、重要性については市民の理解が進んでいる。水の問題についても同様の認識に立っているものの、それを支える林業の振興については、支援する底辺の広がりがあるものの、積極的な姿勢がそれ程感じられない市民意識が示された。

水をつくるのも、汚物を処理するのも究極は「土」である。そして土の形成者が「森林」であり、土の守り手は山の生産者たる「人間」である。

奥地水源林地帯の森林の管理、経営にあたる国有林のこれまでの努力と、ひたいに汗して働く山人に正当な市民評価を求めたい。

日本文化が一万年も続いているのは、「土」と「緑」と「水」のおかげであること、これを支える林業人は誇りをもって、広く県民にＰＲの努力を継続していきたいものだ。